贖いとしての女性の表象
――G・グリーン『ブライトン・ロック』――

○日大生産工　福島　昇

これは少年と少女の無惨な愛の物語である。なぜに人は、このようにだまされ、裏切られ、殺されそうになりながらも、一途に愛を貫こうとするのか。それはもはや人間の知恵でははかり難い、老神父のつぶやく“the…appalling…strangeness of the mercy of God” (297)[1] なのであろうか。

ローズ（Rose）は、貧しくて新聞もとれない家庭に育った少女である。16 歳を 17 歳と偽ってブライトンのレストランの給仕女として働いている。見栄えのしない少女である。顔は蒼白く、骨張っていて、口は大きく、眼は間延びし、体格の貧弱な、いかにも貧相で、魅力に乏しい。そんなローズがひたむきに愛するのはやくざのボス、17 歳の不良少年ピンキー（Pinkie Brown）であるが、彼のローズへの愛は犯行をかくすための偽りの愛にすぎない。二人の出会いには、殺人事件がからんでいた。

事件はロンドン南方の海浜リゾート、ブライトンで起った。聖霊降臨祭の休日『メッセンジャー』（the Daily *Messenger*）誌の記者ヘイル（Charles Hale）は、新聞に公表されたままの服装で、同じく公表された時間通りに、予定の道筋に従って、ブライトンの町を歩き、コリー・キバー（Kolley Kibber）という名刺をこっそりとおいていく役目である。その名刺を見つけた者は 10 シリングの賞金がもらえる。所がこのヘイルはピンキーとその手下に追われている。ピンキーはやくざの親分カイト（Kite）の子分で、寒さにふるえていたのを、カイトに拾われて、やくざの仲間入りをしたのである。所が、その親分が、敵対するやくざのコレオーニ（Colleoni）一味によって殺されたので、そのあとを継いだ。いま手下と共に、ヘイルを追っているのは、ヘイルが暗殺の片棒をかついだためである。

身の危険を感じたヘイルは、途中知り合った歌手のアイダ（Ida Arnold）という中年の女性に助けを求めて、ピンキーたちの追跡を逃れようとするが、バックミラーにはあとを追ってくる車にピンキーたちの姿が見える。所が食事をするために車を降り、アイダが洗面に行ったちょっとした隙に、ヘイルは殺されてしまった。ブライトン・ロックを口一杯にほおばって死んでいた。ブライトン・ロックは日本の金太郎飴に似ていて、どこをかじっても断面にブライトンの文字が見える飴ん棒である。警察はヘイルの死を、暑い日向を歩き廻ったための心臓発作による自然死と見なした。

アイダは責任感の強い女である。人は理非をわきまえることが大切だと言い、フェアプレイの精神を尊ぶ。曲ったことが嫌いだから、ヘイル殺しの犯人を探索し、ピンキーにたどりつく。しかし警察も、世間も誰一人としてピンキーを怪しむものがいない。彼女は臭いものを放っておくことは我慢ならない。彼女の正義感がそれを許さない。

ピンキーたちがヘイルを殺したとき、そのポケットからコリー・キバーの名刺を奪い、犯行をかくすために、予定表通りにそれをばらまいた。ただピンキーが気掛りなのは、手下がレストランで昼食をとったとき、その名刺をテーブル掛けの下において来たことである。レストランで顔を見られているにちがいないと、ピンキーはその名刺を取り返しに出掛けた。案の定、給仕女のローズがその名刺を見つけて喜んでいたが、キバーであるべき男が新聞の写真とちがうことに気付いていた。

ピンキーは酒も飲めず、煙草も嫌いで、性に対してピューリタン的な恐怖と嫌悪を抱き、それを人間が互いに地獄におとしあう大罪だと考えていた。それは彼の幼児体験の不幸な歪みであるが、両親の土曜の夜のいとなみに獣のいとなみめいたものを見た。その時以来彼の童心は失われてしまった。失われた無垢に対する彼の復讐は、この世の善や愛を一切否定し、殺伐と残虐とを生き甲斐とする非情の道を歩ましめた。実を結ぶことなくつみとられた童心に対する迷える魂の必死の抵抗は、破廉恥と背徳の行為によって、世の罪や恐れをふみにじることであった。

ピンキーはローズに近づき、その口をふさぐために、甘い言葉で愛をささやいた。じつは彼はローズの貧相な姿に嫌悪しか感じなかったのであるが、無邪気なローズは彼の言葉を信じ、ひたむきに彼を愛して行った。

そのことに気付いて“Your life’s in danger” (238) とアイダは言う。あなたの愛しているのは殺人犯なのよ、そんな男の口車にのってはいけないと、アイダはこの単純な少女を救おうと、ローズにつきまとう。甘い言葉を真に受けてワナにかかっている小娘を救ってやろうと躍起になるが、ロー

Representation of a Young Woman as Atonement—
Graham Greene’s *Brighton Rock*

Noboru FUKUSHIMA

ズは本能的にアイダを嫌っている。

ピンキーは、ローズをデートに誘い、やってきた彼女に硫酸のビンを見せて、もししゃべればこれで顔をめちゃくちゃにしてやるぞと脅迫した。しかしローズはピンキーを少しも恐れなかった。同じカトリックとしての同類意識があったからである。

ローズの直感は、アイダの正義感をたたえたどんよりした瞳の奥に何もないことを見破っていた。煙によごれたブライトンの道を、自分を「救い」にやってくるこの親切な女を、ローズは少しも信用していなかった。ローズはアイダを自分の同類だとは思わなかった。殺人犯のピンキーと無邪気なローズとが同類であって、彼らとアイダとは縁もゆかりもないとはどういうことなのか?ローズの同類意識の根底には、“Flames” (66)という認識がある。カトリックであるローズには地獄の火焔が実感として迫ってくる。“Oh, she won't burn. She couldn't burn if she tried” (139)。

ピンキーを殺人犯と感付きながらも、アイダの忠告をよそに、ピンキーへの愛をいちずに貫こうとするローズ、その単純なローズの心には、つねに地獄に堕ちる罪の自覚があった。罪の子ピンキーの自棄的な罪悪感と、無邪気なローズの敬虔な心に巣くう罪悪感と、この二つの罪悪感が彼ら二人を'Not a pin' (224)とし、アイダを赤の他人とするのである。

“right and wrong” (138)と“good and evil” (154)という全く異質な二つの人間観がある。アイダのたくましさは、正邪の別が人間の価値の規準であると考える所から来る。“An eye for an eye (47)で割り切れるからである。薄汚いもの、うしろめたいもの、邪まなものを排斥すればすむからである。

正邪は人間の掟であり、善悪は神の掟である。正邪の争いは人と人とのいざこざであり、善悪の葛藤は神と悪魔との闘いである。正邪のけじめをつけようとするアイダ的知恵は、浅薄な人間の浅薄な生の理解にすぎない。どんと腰をすえて、のさばり返ったアイダの背後に、浅薄で安逸で、そのくせ妙に健全な人生の果てしない拡がりが感じられる。そのひろがりの中でローズの純情は戸惑わざるを得ない。作者はアイダとローズという次元を異にする二つの世界をからみ合わせ、常識が苦悩を追いつめて行く構図の中に、相反する女性の二つの姿を描き分けている。

アイダはヘイルが教えてくれた馬券が当たって２百ポンドという大金を手にしたので、これでじっくり殺人犯を追いつめることができると意気込んだ。ピンキーは手下のスパイサー（Spicer）が敵に寝返ったと見て、階段から突き落とし、事故死に見せかけて殺してしまった。この死にローズは不審を抱いた。新聞の記事とピンキーの話がくいちがっているからである。ピンキーはローズを強くしばりつけるには、結婚するしかないと考えた。ローズは客のアイダに失礼な振舞いがあったということで、レストランをクビになっていた。彼女の収入に頼っていた両親はがっかりしていた。そこにピンキーがやって来たので、両親は始めはひどく怒ったが、15 ギニーの金を渡すと、結婚を承諾した。

17 と 16 の少年、少女を結婚させてくれる教会はどこにもない。仕方なく、二人は市役所の戸籍係の前で、顧問弁護士のプルウィット（Prewitt）と手下のダロー（Dallow）の二人が立会人となって、形ばかりの結婚式を挙げた。

帰る途中“Make a record of your own voice” (212)という看板が目についた。ローズはピンキーにぜひ吹き込んで欲しいと頼んだ。いやだ、というとローズは烈しく怒り出し、“I'd rather drown” (213)と言った。ローズの従順さの奥にはこんな烈しい意志があった。ピンキーが永く留守をするときに、愛の言葉をレコードで聞きたいのだと言った。いやいやながらピンキーは、“God damn you, you little bitch, why can't you go back home for ever and let me be” (214)と吹き込んだ。その黒い円盤を人ごみから守るように大事にかかえながらローズは歩いていった。悪は善を憎み、善は悪を愛する、という不合理な関係においてのみ、善は悪の贖いを果そうとする。しかし善は悪に対して、悪魔との絶縁をしいるほどの力はない。

新婚の夜を一流のコスモポリタン・ホテルに泊ろうとしたが、ていよく断られ、がっかりして二人はアパートの部屋に戻った。“She was good, he'd discovered that, and he was damned: they were made for each other” (154)とピンキーは思った。やせた未成熟の子供が、洗面器台とベッドの間で震えていた。“you're scared” (219)というピンキーの声は４年前学校で友達を何か悪いことに誘いこもうとしている時とそっくりだった。

彼は彼女をベッドに押しつけた。“It's mortal sin” (219)と無垢の香気から、神の味を味わいながら彼は言った。悲しい獣的な抱擁の中で一切を抹殺しようとした。

苦痛の叫び、けたたましいベルが鳴った。“Christ,”…“can't they let a man alone” (219)と彼は言った。薄暗い部屋の中で、彼は眼を開いて、今成し遂げたことを見ようとした。

（中略）

ローズは結局ピンキーの罪を贖い得なかったし、悲惨極まりない結末を迎えることになった。そこに人間の愛の限界があるのかもしれない。

（後略）

参考文献

1. Greene, Graham. *Brighton Rock*. London: Everyman's Library, 1938.